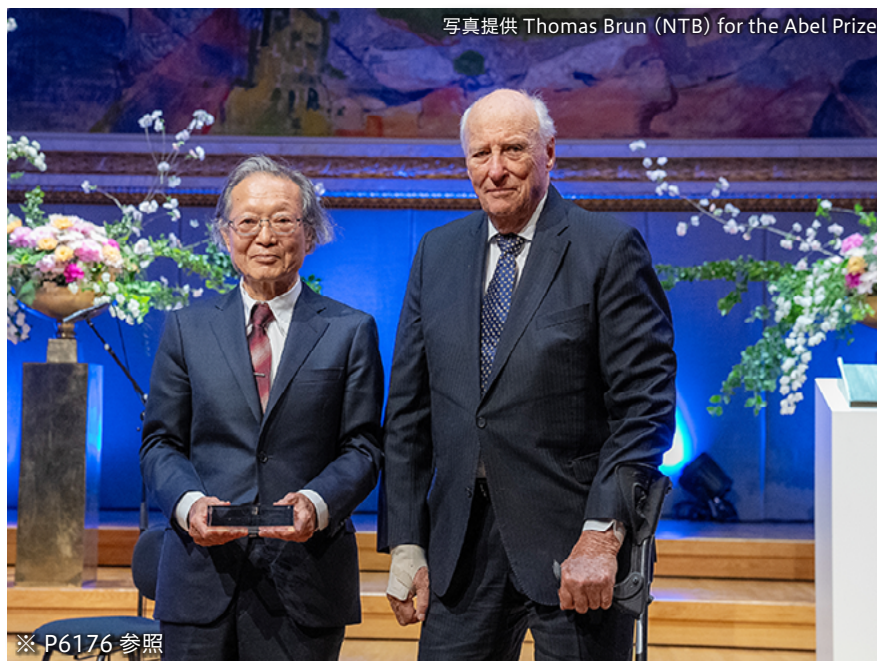


京大 広報

KYOTO UNIVERSITY



写真提供 Thomas Brun (NTB) for the Abel Prize

※ P6176 参照



※ P6183 参照



※ P6177 参照

2025.7

No. 781

目次

[大学の動き]

- 柏原正樹数理解析研究所特任教授、高等研究院
特定教授がアーベル賞授賞式に出席 6176
- 2024 年度「女子学生チャレンジプロジェクト」
成果発表会を開催 6177
- 国際交流イベント「ウクライナ文化イベント」を
開催 6178
- 公開講座京大知の森（令和 7 年度春季）を開催 6180

[部局の動き]

- 医学部附属病院で令和 6 年病院長賞表彰式を举行 6182
- バルセロナ大学への短期派遣プログラムを実施 6183

[寸言]

- コーポレート・ガバナンス改革の現状と今後
山道 裕己 6185

[随想]

- 不垢不浄不増不減不生不滅の地球
名誉教授 松井 三郎 6186

[洛書]

- 診断の暗がりに光を灯す：医学教育上の課題と省察
和足 孝之 6187

[訃報]

- 松本 紘 元総長 6188



京都大学

所属・職名については、行事開催時点のものです。

大学の
動き柏原正樹数理解析研究所特任教授、高等研究院特定教授が
アーベル賞授賞式に出席

2025年5月19日(月)から22日(木)の4日間、ノルウェーにおいて、アーベル賞ウィークの公式行事が開催され、2025年アーベル賞受賞者である柏原正樹 数理解析研究所特任教授、高等研究院特定教授が出席しました。

まず、5月19日(月)にアーベル賞ウィーク公式オープニングとして、同賞の由来である数学者ニールス・アーベルの母校オスロカトリック高校にて、優れた数学教師を顕彰するホルムボー賞授賞式などに参加しました。午後には、アーベルの丘にあるアーベル記念碑を訪れ、花輪をささげました。夕刻には、特別招待者のみ出席できる「数学的晩餐会」に出席しました。

翌日の5月20日(火)は、ノルウェー・オスロ大学セレモニアルホール(アウラ講堂)にてアーベル賞授賞式が開催され、柏原特任教授に、ノルウェー国王であるハーラル5世陛下よりガラス製の表彰楯が手渡されました。柏原特任教授は、受賞スピーチにおいて「数学において新しいものを創造することの大切さ」を強調しました。特に恩師である佐藤幹夫先生から学んだこの教訓が自身の研究人生の重要な指針となったと述べました。授賞式後には、ノルウェー政府主催による公式晩餐会がアーケシュフース城で行われ、柏原特任教授をはじめとする関係者が出席しました。

また、5月21日(水)にはオスロ大学ブリンデン・キャンパス内大学図書館「Georg Sverdrup's house」館にて、柏原特任教授による特別講義が実施され、多くの参加者がその講義に耳を傾けました。



授賞式の様子1 (写真提供: Thomas Brun, NTB / The Abel Prize)



授賞式の様子2 (写真提供: Thomas Brun, NTB / The Abel Prize)



花輪贈呈式の様子



特別講義の様子 (写真提供: Thomas Eckhoff / The Abel Prize)

大学の
動き

5月22日(木)にはトロンハイムに移動し、ノルウェー科学技術大学「Glassgarden」にて中高生による数学コンペティションの表彰式、柏原特任教授による特別講義、祝賀行事などが開催されました。

また、帰国後の2025年6月4日(水)には、学内でオンラインでの記者会見に応じ、数学者を志す若手に向け「どんな小さなことでも良いから新しいことに挑戦してほしい」と呼びかけました。

アーベル賞は、数学分野における最高峰の賞の一つであり、その受賞は世界中の数学者にとって大変な名誉とされています。柏原特任教授は、代数解析学の分野において、特に「D加群」と呼ばれる基礎理論の構築をはじめとする、50年以上にわたる研究活動と数々の研究業績が高く評価されました。また、これまで、代数解析学を中心に数多くの重要な研究成果を発表し、数学の発展に大きく貢献してきました。その功績は国内外で広く知られ、今回の日本人初のアーベル賞受賞という快挙により、改めてその偉大さが国際的に認識されました。

【関連リンク】

柏原正樹 数理解析研究所特任教授、高等研究院特定教授がアーベル賞を受賞しました

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/news/2025-03-26-4>

柏原正樹 数理解析研究所特任教授、高等研究院特定教授がアーベル賞受賞記者会見を行いました

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/news/2025-03-28-3>

The Abel Prize

<https://abelprize.no/>

柏原 正樹 | 京都大学数理解析研究所 - RIMS, Kyoto University

<https://www.kurims.kyoto-u.ac.jp/ja/list/kashiwara.html>

プロフィール：柏原正樹 | KUIAS 京都大学高等研究院

<https://kuias.kyoto-u.ac.jp/j/profile/kashiwara>

京都大学図書館機構 - アーベル賞を受賞された柏原正樹 数理解析研究所特任教授、高等研究院特定教授の関連論文等のリンク集を公開しました

<https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/bulletin/1403890>

(数理解析研究所、高等研究院)

[目次に戻る ↗](#)

2024年度「女子学生チャレンジプロジェクト」成果発表会を開催

2025年3月25日(火)に、2024年度「女子学生チャレンジプロジェクト」に採択された5チームによる成果発表会を開催しました。「女子学生チャレンジプロジェクト」は、DEIB(ダイバーシティ、エクイティ、インクルージョン&ビロッキング)の推進を目的として本学で実施している取り組みの一つであり、女子学生がチームリーダーとなって、自らの好奇心や探求心を核とした新しい課題に挑み、メンバーと多様な視点から議論し協働するプロセスを通じて、研究の面白さを感じられるような活動を後押しするものです。

当日は、同プロジェクトの企画、審査に携わった男女共同参画推進センター専門部会の委員をはじめとする関係者が参加しました。

大学の
動き

平山朋子 理事補の挨拶に続き、各チームが自身の興味関心に基づいて設定した研究テーマへの課題探求の成果を発表しました。いずれもチームで協働して取り組んだ意欲的な内容で、会場からは活発な質問も寄せられました。

発表会の締めくくりには、稲垣恭子 理事・副学長から、「今回の経験をさまざまな社会課題にもつなげていけるよう引き続き頑張っていたきたい」とのエールが送られました。

【関連リンク】

各チームの成果発表の内容については、以下のリンクをご覧ください。

男女共同参画推進センター 2024年度「女子学生チャレンジプロジェクト」実施内容

<https://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/story/w-challenge/w-challenge2024/>



平山理事補による挨拶



学生による発表



稲垣理事による全体講評



成果発表会に参加したメンバー

(人事部(職員育成課))

[目次に戻る](#)

国際交流イベント「ウクライナ文化イベント」を開催

2025年5月30日(金)に、国際交流イベント「ウクライナ文化イベント」を国際高等教育院棟1階ロビーにて開催し、63名が参加しました。本イベントは、ウクライナの文化を通じてウクライナに関心を持ってもらうこと、ウクライナ学生と本学学生との交流を生み出すことを目的としています。プログラムは、本学で現在受け入れているウクライナ学生のうち9名が企画し、ウクライナで親しまれているハーブティーを提供し、伝統行事において若い女性が編んで作るという花冠を身に着けて参加者を歓迎しました。

イベントでは、ウクライナ学生から、ウクライナの国土は日本の約1.6倍であること、肥沃な大地を有する農業国であることなどの特長の説明があった後、料理やアート、ダンスやイースター

大学の
動き

エッグなど、同国の豊かな文化をさまざまな面から紹介するプレゼンテーションが行われました。その後、2ヵ所の展示コーナーにて、民族衣装などの伝統文化が現代にも受け継がれている様子が紹介されました。参加者はそれぞれ、ハーブティーを楽しみながら熱心に聞き入っていました。

交流タイムでは、ウクライナ学生と本学学生が話に花を咲かせました。また、花冠を身に付けてウクライナ学生と一緒に記念撮影する姿も見られました。

本学学生からは、「ハーブティーがおいしかったのでレシピを知りたい」、「戦争以外の文脈で、固有の豊かな文化について知る貴重な機会だと思って参加した」、「独学でウクライナ語を勉強していたので、ウクライナ語を話すことができうれしかった」などの声が寄せられました。また、ウクライナ学生からは、「ウクライナの文化に興味を持ってもらえて驚いた。このような機会に感謝したい」との声がありました。



プレゼンテーションの様子



ウクライナの料理を紹介する様子



ウクライナのダンスを紹介する様子



民族衣装などウクライナ文化を紹介する展示



本学学生とウクライナ学生との交流

参加者にとって、ウクライナ文化のさまざまな側面について英語で学ぶ機会となっただけでなく、ウクライナについてもっと知りたい、今後も交流を続けたい、と考える良いきっかけとなりました。

学務部 (国際教育交流課)

[目次に戻る](#)

公開講座京大知の森（令和7年度春季）を開催

公開講座京大知の森（令和7年度春季）を、2025年4月13日（日）に、国際科学イノベーション棟 HORIBA シンポジウムホールにて開催しました。

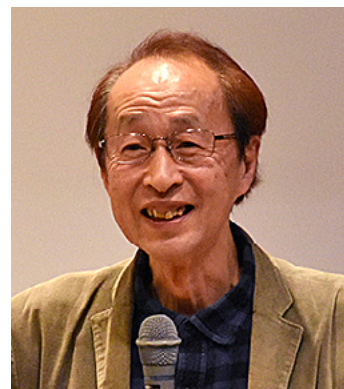
京大知の森は、本学の知を広く学内外の人々に向けて発信するため、2023年秋から開催している公開講座です。研究者の手引きのもと、講演や討論を通して多様な研究分野を持つ本学の「知の森」に分け入り、研究の面白さや意義を伝えることを目的としています。

第4回となる今回は、「地域研究の視点から読み解く『グローバルサウス』」をメインテーマとして、池亀 彩 アジア・アフリカ地域研究研究科教授による「大国インドとどう付き合うか?」、松田素二 名誉教授、総合地球環境学研究所特任教授による「私たちは今、アフリカから何を学ぶのか」と題した2つの講演を実施しました。世界の多極化が進む中、「グローバルサウス」と呼ばれる地域からの新たな潮流が注目されていますが、そのダイナミズムの背景には、政治や経済に加え、歴史、文化、社会構造といった要素が複雑に関わっています。今回はこれらの地域の社会や価値観などについて、本学が長年深い関わりを持つアジアやアフリカ等のフィールドと地域研究者の視点から解説しました。

池亀教授からは、人口世界一となり経済発展を遂げるインドについて、現代インド社会とカーストの関わりや、グローバル化の中の日印関係などについて紹介されました。また、講義後には著書のサイン販売会も実施し、人気を集めました。松田名誉教授からは、われわれの中に埋め



講演する池亀教授



講演する松田名誉教授



対談、質疑応答の様子



会場の様子

大学
の
動き

込まれているアフリカ観とそれに対する現地の視点、暴力や紛争の歴史とアフリカで実践される問題解決のための知恵（パラヴァー）などについて、個人の体験も交えつつ紹介されました。加えて、両講師による対談では、参加者からの質問も交え、各地域から見た他国や日本、経済成長と多文化共生、援助・支援のあり方などのトピックについて、講師それぞれの専門的見地から活発な対話が行われました。

当日は230名以上の参加があり、参加者からは、「海外情報を一般的な知識とは違った視点で教えていただき大変有意義だった」、「テーマ設定が斬新で興味深い」、「対談形式がすばらしく、現地からの生のトークに迫力を感じた」などの感想が多数寄せられました。

また、国際科学イノベーション棟1階の交流スペース「linkhub@（リンクハブ）」にて本講座の同時中継を実施しました。併せて、両講師の著書の特別配架も期間限定で実施しました。

【関連リンク】

本講演内容は「KyotoU Channel」にて配信しています。申し込み不要でどなたでもご覧いただけます。

KyotoU Channel 知の森（春秋講義・未来フォーラム）特集ページ

<https://www.channel.pr.kyoto-u.ac.jp/feature/9>

（成長戦略本部）

[目次に戻る ↗](#)



医学部附属病院で令和6年病院長賞表彰式を举行

医学部附属病院は、令和7年3月25日(火)、28日(金)に令和6年病院長賞表彰式を举行しました。

同賞は、本院における教育、研究、診療、管理運営などについて、極めて顕著な貢献があったと認められる若手教職員または診療科などを表彰しています。今年度は、個人および団体の推薦の中から7組の受賞者を表彰しました。

表彰式では、高折晃史 医学部附属病院長より、受賞者および受賞内容について発表があり、表彰状が授与され、祝辞が述べられました。

令和6年病院長賞受賞内容

①放射線部・放射線治療科のRI治療に関与したチーム

神経内分泌腫瘍に対する内照射療法(PRRT)を精力的に行い、病院への収益を増加させた。2024年6月の診療報酬改定に伴い、PRRTはそれまでの出来高(約29.5万点)からDPC(約47万点)に引き上げられた。薬剤等が約26.5万点であることを考慮すると、病院への収益は1回あたり約20万点となる。

2024年の医学部附属病院におけるPRRTの実績は1月から5月まで25件、6月から11月末で41件であり、合計約1億円の利益に寄与しているものと推測される。

②チームCAR-T

造血器疾患に対する新規治療である「キメラ抗原受容体(CAR)-T細胞療法」に関して、多くの施設から患者紹介を受け、全国屈指の症例数を経験した。

チームCAR-Tメンバーが所属する院内各部署との連携により、患者の治療待機日数を削減することで、柔軟な治療計画設定が可能な体制を構築し、治療成績の改善とともに、他院では受け入れ困難な状態不安定症例の受け入れも可能にした。

実臨床データを元に細胞採取、CAR-T作成、投与後の効果と合併症についてデータ解析を行い、多くの論文発表を行った。

③中病棟ケアユニット3病棟(ICU、HCU、EICU)(同時受賞)

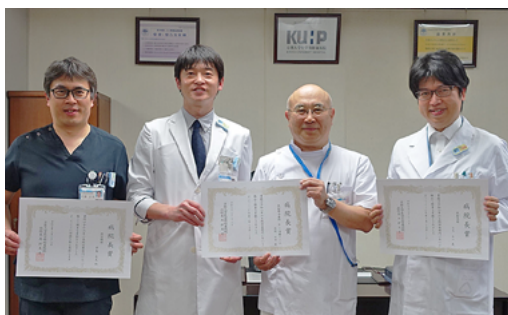
地域や病院からの要請に応じて大掛かりな病床数の拡大、患者応需機能の向上を果たし、診療の質の向上、ならびに病院経営の改善に貢献した。

④ケアユニット60床化検討WGメンバー(同時受賞)

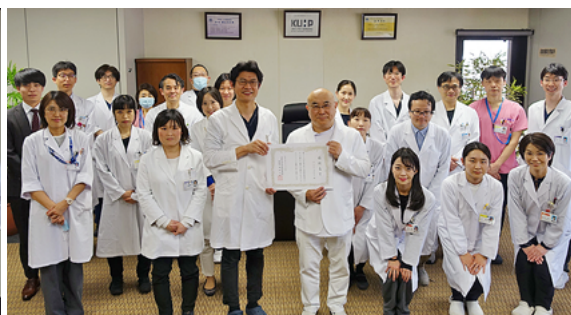
さまざまな課題を解決し、ケアユニット60床化運用を達成した。

⑤救命救急センター

医学部附属病院の救命救急センターは、これまでの国立大学病院トップクラスの救急車搬入実績等に基づき2024(令和6)年4月1日に京都府の救命救急センターに指定され、



受賞した放射線部・放射線治療科のRI治療に関与したチーム



受賞したチームCAR-T

部局の
動き

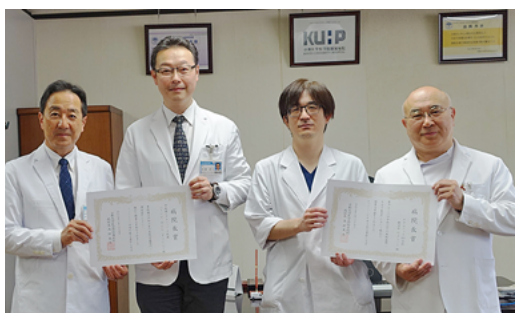
さらなる地域の救急医療への貢献が顕著に認められている。特に、京都府内の第3次救急医療機関として、医学部附属病院の高度かつ広範な専門性と充実した診療体制・設備を生かして、重症および複数の診療科領域にわたる重篤な救急患者を24時間体制で受け入れ、京都府の救急医療体制の充実に貢献している。また、救命救急センターの指定に伴い、新入院患者の獲得およびEICUの稼働等病院経営にも貢献している。

⑥周術期管理センター WG メンバー

周術期における業務フローについて標準化・効率化に向けた取り組みを行った。

⑦病院125周年記念事業準備WG、総務課企画・広報掛、京大病院125周年基金室

病院の歴史的な開設125周年事業の企画・運営を中心となってい、成功裏に収めた。



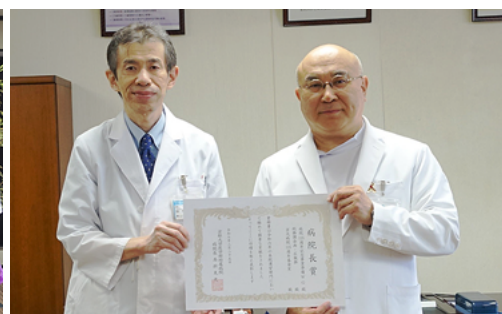
受賞した中病棟ケアユニット3病棟とケアユニット60床化検討



受賞した救命救急センターメンバー



受賞した周術期管理センター WG メンバー



受賞した病院125周年記念事業準備WGメンバー
(医学部附属病院)

[目次に戻る](#)

バルセロナ大学への短期派遣プログラムを実施

国際高等教育院では、海外の大学間学生交流協定締結校に本学学生を約2週間派遣する全学共通科目キャリア形成科目群「多文化教養演習：見・聞・知@～」を実施しています。このたび、2025年3月4日（火）から3月17日（月）にかけ、20名の学生がスペインのバルセロナ大学にてスプリングプログラムに参加しました。

今回が初となる本プログラムは、本学とのジョイントディグリーを実施しているバルセロナ大学経済学部にて実施されました。スペイン語やカタルーニャ語の語学授業に加え、スペインとカタルーニャの歴史、経済、社会、言語多様性について学ぶ特別講義など、現在のバルセロナについて多角的に考察を深める構成となりました。

プログラムでは、ガウディを含むバルセロナの近代建造物の視察や移民が多く住む地区の小学校の見学などを実施し、参加学生たちは貴重な経験を得ることができました。終盤には、ス

部局の
動き

ペイン語でのグループプレゼンテーションを行い、2週間の現地滞在で学んだことを生かした発表を行いました。

国際高等教育院では、夏(8～9月)と春(2～3月)に東アジア、東南アジア、欧州の協定校にて、全学共通科目「多文化教養演習：見・聞・知@～」を含む短期派遣プログラムを提供しており、長期留学への準備や、初めて海外の大学で学ぶ機会としても活用できます。海外留学に関心のある本学学生の積極的な履修を期待しています。



授業の様子



バルセロナ市内の近代建築



現地小学校の視察



サッカー観戦

(国際高等教育院)

[目次に戻る](#)

寸言

コーポレート・ガバナンス
改革の現状と今後

山道 裕己



ここ数年、日本の資本市場とりわけ株式市場に対して内外投資家から高い関心が寄せられている。その背景には日本経済のデフレ脱却や東アジアにおける地政学的緊張の高まりによる資産再配分の動きなど複数の要因が挙げられるが、日本企業のガバナンス改革の進捗も一因であるとの評価が一般的である。

私が京大を卒業した1977年当時は銀行が企業のガバナンスを担っていたが、バブル崩壊や市場自由化、世界金融恐慌を経てより実効的な規範を求める機運が高まった。日本のコーポレート・ガバナンス・コード（以下「CGC」という。）が制定され、東京証券取引所の上場規則の一部を構成するようになって今年で10年が経過した。CGCは「日本経済の活性化には民間企業の『稼ぐ力』の向上が不可欠である」という、故安倍首相の信念に基づいた攻めの経営判断を後押しする仕組みであり、東証・金融庁が事務局を務める有識者会議の提言をベースに策定・公表された。CGCは、遵守義務のない、所謂「コンプライアンスorエクスプレイン」かつ原則主義を採用している。各原則の形式的な遵守よりも、遵守しない場合の説明を丁寧に行うことが重要という考えに基づいている。また、その目指すところは、リスク管理や不祥事防止のみならず、健全な企業家精神の発揮、業務執行サイドの合理的なリスク・テイクを支える体制の整備にある。CGCは、2度の改訂を経て、2022年4月の市場区分見直し後からプライム市場上場企業に対して社外役員比率や環境関連開示においてより高い水準を要求している。現状を見ると、プライム上場企業の98%以上で取締役会における社外役員比率が1/3以上となり、また、任意も含めると指名委員会や報酬委員会を設置している企業が90%を超えるなど形式面でのガバナンス体制はかなり整ってきたといえる。しかしながら、数字面での一定水準の達成がCGCの本来の目的ではなく、中長期的な企業価値向上を促すような取締役会の機能発揮や投資家・株主との対話の活性化・高度化など実質面での進展が必要不可欠である。

東証では、企業の実質面でのガバナンス向上を支える環境整備として、市場区分見直しでは企業の新市場選択に取締役会決議を必須とし、2023年3月末には「資本コストや株価を意識した経営の要請」を発出して取締役会での資本効率性の分析・議論と改善策の策定、投資家との対話による見直しを促した。内外投資家からは企業経営陣の意識変化がはっきりとみられると評価されている。

ガバナンス改革の現状の評価を問われると、「改革はまだ始まったばかり」と答えている。我々が目指すのは、上場企業が資本効率性や収益性を意識して、持続的な成長を図ることが普通となる市場である。多様な企業がそれぞれの現状に即して成長戦略を実行し、投資家がしっかりと建設的にエンゲージする。そのような市場に向かって市場開設者としても努力を続けたいと考えている。

（やまじ ひろみ、株式会社日本取引所グループ グループCEO、昭和52年法学部卒業）

[目次に戻る ↗](#)

随想

不垢不浄不増不減不生不滅
の地球

名誉教授 松井 三郎



京都大学工学部衛生工学科は、戦後復興の都市環境整備を進めるために帝国大学土木工学第3講座（衛生工学）を基礎に昭和33年（1958年）に医学部、理学部の協力で設立された。現在、京都大学は世界でも最も充実した衛生・環境・地球環境の研究と教育体制をもって、課題解決に努力している。衛生工学の発展は医学と理工学（Science and Art）の両輪で展開されてきた。

私の研究で思い出深い、セレンディピティ（偶然の成果）を紹介したい。ダイオキシン汚染が世界で認知されたことから、人体に摂取されたダイオキシン（TCDD）が尿中に排泄されるかどうか？に疑問を持った。

一方、世界で都市下水道整備が普及するが、窒素、リン酸、カリの3大肥料の回収農業循環が放置されている。衛生の根本解決は、尿と尿を分離し、尿中にある3大肥料の農業循環と尿（血液を含む）の適切な処理（アルカリ堆肥発酵等）により残余の3大肥料を循環する（江戸時代の現代版）ことで食糧安全保障を実行できる。将来の資源枯渇（特にリン酸）を考慮すると、このように農業資源として回収利用することが益々求められる。

2000年頃には、既にスウェーデンではストックホルム近郊団地で、尿尿分離下水道が導入されている。このことから翻って下水道設置が困難な、インド、アフリカ等の農村地帯に戸別の尿尿分離トイレ建設と普及を図る活動を京都の国際団体と一緒にやってきた。水洗型尿尿分離トイレをスウェーデンから輸入し、研究する一方、先述の疑問を解明するため約50人分の学生の尿を回収し、濃縮し、分離して、ダイオキシン検出を試みた。幸い、助手の松田知成君（現在、大学院工学研究科都市環境工学専攻環境衛生学講座教授）が導入した、酵母にヒト型ダイオキシン受容体遺伝子を組み込み、ダイオキシンや多環芳香族類を検出する方法で、学生達の尿を測定すると、ダイオキシンは検出できず、インディゴ・インディルビンが検出された。これは偶然であるが大発見になった。インディゴ・インディルビンは食品にあるアミノ酸のトリプトファンが腸内細菌と肝臓の働きで2分子結合したもので、立体分子構造がわずかに異なっている。人はこの自然の物質（本来のリガンド）を尿中に排除する代謝を行っている。邪魔なダイオ

キシンや多環芳香族類（石炭・石油燃焼物質）が細胞に入り込み、受容体結合しても排除が困難で、細胞内代謝が複雑に攪乱され、最悪の場合、遺伝子障害（発がん・奇形等）を起こす。この発見から藍（藍の発酵で細菌が生成するインディゴ・インディルビン）を使う漢方薬の効き目に関する研究が見直され、現在は腸内細菌学会でインディゴ・インディルビンとそれに似た物質が、人の免疫や脳活動の健康にどのような役割を果たしているか探求が始まっている。



図は、尿から抽出したインディゴ（左）、インディルビン（右）。インディゴとダイオキシンの受容体結合力は同程度、インディルビンは10倍強い。

（まつい さぶろう、平成19年退職、元大学院地球環境学堂教授、
現在松井三郎環境設計事務所代表、専門は環境工学）

[目次に戻る](#)

洛書

診断の暗がりには光を灯す：
医学教育上の課題と省察

和足 孝之



近年、世界保健機関（WHO）は、診断エラー（Diagnostic Error）、すなわち誤診、見逃し、診断の遅れといった現象を、公衆衛生上の最重要課題として明示しています。その理由として医師の専門外来でも少なくとも数%、救急外来のような複雑で状況変化が激しい環境では10%弱程度の診断エラーが発生することが研究で判明してきました。患者への有害性のみならず医療経済的損失や医療施設、医療者にとっての負担も甚大であることがわかっています。一方で、我が国では、診断技術の向上を目的とした基礎的研究などは数多く行われてきましたが、医療の負の側面である診断エラーに正面から向き合う研究は未だ少なく、医療者の関心はかなり限定的であるように感じられます。

臨床現場において、医師は常に曖昧で不完全な情報を科学的な思考に変換しつつ確率を元に迅速な判断をしています。その過程で、我々の診断プロセスはしばしば無意識の偏り「認知バイアス」に影響されます。例えば、経験した症例が過剰に想起される「利用可能性バイアス」や、初期情報に過度に引きずられる「アンカリング・バイアス」などは、熟練した医師においても例外ではなく、むしろ経験と直観に頼るその判断がエラーの原因となりえます。聞き慣れない言葉かもしれませんが、私がおこなっている診断エラー学というのは、医療者の過失を責めるための学問ではなく、むしろ医療の本質である不確実性と複雑性に対して、自らの認知過程を冷静に省察し、診断を構造的に再構成するという知的営為にはほかなりません。医師として、プロとして成長していくために、自らの診断（判断）を振り返ることができる正直さと分析能力が極めて重要であると信じます。この視点に立ち、私は患者安全の観点から我が国の医学教育において「誤りから学ぶ」ための基盤も整備していく必要があると考えてきました。従来の我が国の卒前医学教育では、基礎医学分野では解剖学や生理学など、臨床医学では臓器別や疾患別などといった縦割りを基盤とした体系的知識の伝授に重きが置かれてきました。一方で臨床推論のような動的で文脈依存的なプロセスは、横断的かつ俯瞰的な視点がどうしても必要となります。これまでは医師にとって重要な「診断の教育」は個人の経験に委ねられやすく、教育も「見て学ぶ」「盗んで学ぶ」という徒弟制度的なやり方が主流を占めていました。社会が曖昧で複雑で不安定で変動が激しい昨今、医学教育に携わる人間として私は医療を横断的・俯瞰的に伝える新しい視点が必要になってきたと確信しており、京大を中心として国の医療を良くしたいという思いが強くなります。

医師にとって診断エラーに向き合うということは、単なる「ミスをなくす」営みではなく、人間の限界と可能性を受け入れ、未来の医療者に「省察する力」を手渡す教育の営みそのものです。ウィリアム・オスラーの言葉に、「3時間机で学ぶより、15分ベッドサイドに立つ方が学びは大きい」とあります。私は、これに「そして、その15分に対して5分省察することが、良い医師を育てる」と付け加えたいと思います。

（わたり たかし、医学部附属病院 総合臨床教育・研修センター准教授、
専門は診断エラー学）

[目次に戻る](#)

訃報

このたび、松本 紘 元総長・名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。
以下に同氏の略歴、業績などを紹介します。

松本 紘 元総長・名誉教授

松本 紘先生は、令和7年6月15日に逝去されました。享年82。

先生は、昭和40年3月京都大学工学部を卒業後、同42年3月大学院工学研究科修士課程を修了され、同48年7月京都大学工学博士の学位を授与されました。

昭和42年4月京都大学工学部助手、同49年4月同学部助教授、同56年4月同大学超高層電波研究センター助教授を経て、同62年同センター教授に昇任されました。その後、平成12年4月京都大学宙空電波科学研究センター設置に伴い、同センター教授に配置換となり、さらに、同16年4月の京都大学生存圏研究所設置に伴い、同研究所教授に配置換、宇宙圏電波科学分野を担当されました。

この間、宇宙プラズマ物理学、宇宙電波工学の研究に永年にわたり従事され、また、工学部電気系教室（現電気電子工学教室）および大学院工学研究科電子工学専攻、電気工学専攻、大学院情報学研究科通信情報システム専攻の協力講座として電波工学講座・宇宙電波工学分野等において、学部・大学院学生の教育・研究指導に熱意をもって取り組まれ、多くの有能な人材を社会に輩出されました。平成4年4月から平成10年3月まで京都大学超高層電波研究センター長、平成14年4月から平成16年3月まで同大学宙空電波科学研究センター長、平成16年4月から平成17年9月まで同大学生存圏研究所の初代所長を務められました。

その後、平成17年10月に京都大学理事（財務・研究担当）・副学長に就任され、理事在任中の平成18年4月には同大学名誉教授の称号が授与されました。平成20年10月には京都大学総長（京都大学長）に就任され、平成26年9月30日任期満了により退職されました。

先生は、宇宙電波科学の分野において、理学、工学両者の立場で、幅広い多くの研究業績をあげられました。特に、宇宙プラズマが示す非線形ミクロプロセスの重要性を早くから見抜き、「衛星観測」、「計算機シミュレーション」という手法の開発に、その黎明期より先見性をもって取り組み、用いることで、世界に先駆けた研究成果をあげられました。先生は、開発した衛星搭載観測器により、それまで知られていなかった「静電孤立波」を1994年に発見されました。そして、計算機シミュレーションにより、その特異な現象の実体を、電子ビームに起因する非線形現象として体系的に説明することに成功されました。この現象は、今や、宇宙プラズマ中で発生しうる非線形現象として広くこの学術分野に知られるに至っています。また、先生は宇宙空間を理解した上で、宇宙を人類の未来のために利用していこうとする姿勢を常にもたれ、その大きなターゲットとして、「宇宙太陽発電衛星」に関する研究開発にも情熱を傾けられました。宇宙空間で発電したエネルギーをマイクロ波で地上に伝送することでクリーンなエネルギー源を確保する構想です。先生は、ここでキーとなる「マイクロ波エネルギー無線伝送技術」を、世界で初めて宇宙空間で実証することに成功し、まさに、この分野におけるトップランナーとして世界を牽引されました。また、日本人として2人目となった国際電波科学連合(URSI)会長、地球電磁気・地球惑星圏学会会長など多くの学協会における要職を歴任され、国内外の学術分野



訃報

の発展に大きく貢献されました。そして、これらの業績に対して、昭和50年地球電磁気学会・田中館賞、平成11年アメリカ地球物理学会AGUフェロー、平成18年Russian Federation of Cosmonautics Gagarin Medal、平成18年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞、平成20年国際電波科学連合Booker Gold Medalなどを受賞されています。

京都大学総長に在任中は、数々の大胆な大学改革を行われたことにより、同大学の発展に大きく貢献されました。大学運営の改革として、理事補や総長室の新設により大学改革の機動力を高め、共通事務部の設置で業務効率化を図られました。また、企業や卒業生とのトップ外交を通じて京都大学基金の寄付額を約110倍の15億円に増やすなど、財務基盤を強化されました。さらに、京都大学鼎会（かなえかい）の発足により、大学外の視点に基づく提言を取り入れるなど、積極的な対外活動を通じた大学改革の基盤を築かれました。

教育・研究組織の整備も大きく推進されました。国際高等教育院を設置し、体系的な教養・共通教育体制を構築することで、幅広い視野と深い教養、優れた創造力をもって国際的にも活躍できる学生の育成を可能にされました。新たな入試制度を推進され、高校での学習や志を評価する「特色入試」を導入されました。グローバルリーダー育成を目指し、大学院総合生存学館（思修館）を新設されました。また、iPS細胞研究所（CiRA）や医学部附属病院内にiPS細胞臨床開発部を設立し、iPS細胞研究の加速に貢献されました。学際融合教育研究推進センターを設置し、学際的な教育研究を推進されました。

強固で確実な国際化のため、達成目標を具体的な数値で示した国際戦略「2x by 2020」を掲げ、次世代のグローバル人材を積極的に養成する「ジョン万プログラム」で学生や若手研究者・職員の国際力養成を支援しました。欧州やASEANに拠点を設置し、海外の大学との協定締結や共同シンポジウム開催を通じて国際交流の推進に尽力されました。

学生支援では、学生総合支援センターの設置や授業料免除枠の拡大、福利厚生施設の改修など、多角的な支援を実施。特に課外活動への支援に力を入れ、課外活動棟の整備や北部グラウンドの人工芝化などを行い、学生生活の充実を後押しされました。

研究面では、次世代研究者育成事業である「白眉プロジェクト」を立ち上げ、若手研究者に自由な研究環境を提供。産官学連携活動も強化し、共同研究講座の設置や技術移転のサポート、iPSアカデミアジャパン株式会社の設立などを通じて、大学の研究成果の事業化を推進されました。さらに、学術研究支援室（KURA）を設置し、研究者の負担軽減と研究力強化に尽力されました。

京都大学退職後は、理化学研究所理事長、国際高等研究所長等の要職を歴任されました。また、教育研究や大学行政等における顕著な業績が評価され、平成19年には紫綬褒章を、令和3年には瑞宝大綬章を受けられました。

以上のように、先生は、優れた研究者として永年にわたり多くの優秀な人材の育成に尽力されたことはもとより、その卓越した手腕とリーダーシップにより、京都大学の最高責任者として、教育研究、組織運営、ならびに教育・研究の国際化や、産官学連携の推進など大学運営のあらゆる面で多大な貢献をなされました。

[目次に戻る ↗](#)